

OCU BUSINESS

大阪市立大学商学部・大学院経営学研究科



OCU Business News Letter 2006 年度特集号

「商学部生の国際交流を進めるシンポジウム—卒業生・在校生・教員が一緒に考える—」

银杏祭の開催中、さわやかな秋晴れのなか、平成18年11月3日（金）、大阪市立大学 学術情報センターにて、「第5回ホームカミングデー」が、開催されました（商学部同窓会組織「商友会」共催）。今回のテーマは、「商学部生の国際交流を進めるシンポジウム」と題し、卒業生・在校生・教員による商学部の国際交流制度や、在学生の利用状況などの報告をして頂きました。当日は、卒業生を中心に多くの方が参加され、今後の商学部の国際交流の推進について、活発なご意見やご提案を頂くことができました。（当日の様子は、本学部HPからも、ご覧頂けるようにする予定です。）

『商学部生の国際交流を進めるシンポジウム—卒業生・在校生・教員が一緒に考える—』

司会：田村晃二（本学部助教授・学部国際交流委員）

当日プログラム

14:00~14:10 開会の挨拶と趣旨説明 太田 雅晴（経営学研究科・商学部長）

14:10~14:15 商友会会長挨拶 安井 吉二（元不二製油 会長）

14:15~15:50 セッション1（個別報告）

1. 『商学部生の国際学生交流の進展状況』 岡野 浩（本学部教授、国際学術交流委員）

2. 『現在の派遣プログラム（ル・アール大学およびオックスフォード大学）に参加して』

藤原 亜里沙（商学部 四回生）

3. 『海外インターンシップを実務界に生かして』

秋山 和寛（2003年卒業、トヨタ自動車株式会社）

4. 『実社会での学生時代での外国語学習、海外経験の必要性』

有馬 良雄（1979年卒業、日本化学機械製造株式会社）

15:50~16:00 休憩

16:00~17:00 セッション2（パネルディスカッション）

『商学部生の国際交流を進めるために』 司会：田村晃二（本学部助教授・学部国際交流委員）

パネラー：安井 吉二（商友会 会長）

有馬 良雄（1979年卒業、日本化学機械製造株式会社）

秋山 和寛（2003年卒業、トヨタ自動車株式会社）

藤原 亜里沙（商学部 四回生）

岡野 浩（本学部教授、国際学術交流委員）

太田 雅晴（経営学研究科・商学部長）

閉会の挨拶

西倉 高明（本学部教授、商友会幹事）

（敬称略）

当日の様子

■太田 経営学研究科長・商学部長 挨拶

今回のシンポジウムの趣旨について、太田先生より、「国際交流の現状を知ってもらいたい、学生の国際交流の必要性、本学での課題を商友会の方々に知っていただき、ご協力をお願いしたい」というご挨拶を頂きました。

その後、太田先生のプロフィールを、写真を交えて、ご自身の国際交流の経験をお話いただきました。太田先生は、工学部出身。学生時代 IAESTE (The International Association for the Exchange of Students for Technical Experience: 日本国際学生技術研修協会) より、ドイツへ渡り、ハノーバー工科大学で研究助手をされていたそうです。

太田先生は、「ドイツ語を勉強して行ったのに、使った外国語が、全部英語で少しがっかりしたんですが、逆に、英語の重要性を非常に感じました」というエピソードを語ってくださいました。

■安井 商友会会長 挨拶

続いて、安井氏から、企業経営者としてのご経験をもとに、ご挨拶を頂きました。

安井氏は、IT スキルと英語の重要性を、「日本語が話せたら、仕事出来るかといえば、決して、そうではないように、仕事をする際には、言葉とか、IT 技術以外にもっと必要なものがあります。しかし、IT、あるいは英語というのは、どうしても必要なものだという風に、お考え頂いたらいいと思います」として、十分条件ではないけれども、必要条件だと説明されました。

その上で、安井氏の会社のアメリカ駐在員の方が、商売の英語には不自由ではないが、文化や芸術の話題についていくことの困難であると感じているというエピソードを挙げられておりました。安井氏は、単に英語を使うだけでなく、異文化理解や、自国の理解が重要であることを強調しておられました。

セッション1 (個別報告)

『商学部生の国際学生交流の進展状況』

岡野浩 (本学部教授、国際学術交流委員)

岡野先生からは、大阪市立大学の国際交流の変遷、商学部・経営学研究科の最近の取り組みと課題、そして、今後のプランについて、ご報告頂きました。



大学間交流の取り組み (1988～) として、サンフランシスコ州立大学、上海市内の全ての大学 (特に、上海財経大学)、サンパウロ大学 (ブラジル)、サンクトペテルブルグ大学 (ロシア)、メルボルン大学、タタ基礎研究所 (インド)、ハンブルグ大学 (ドイツ)、全南国立大学 (韓国) などがあることを示されました。

近年では、部局間交流 (1996～) への移行が進みつつあり、その背景として、大学間交流では、研究ベースであったが、部局間交流により教育の側面が出てきたということが説明されました。具体的には、オックスフォード大学・ハートフォードカレッジ、サイド・ビジネス・スクール (イギリス)、ミュンヘン大学経営大学院 (ドイツ)、ル・アール大学国際学部 (フランス) や、全南大学経済学部 (韓国) など示されました。

また、大学レベルでの研究者交流として、『外国人研究者招聘事業』、『アジア・日本研究フェローシップ』、『国際学術シンポジウム』などの説明がありました。

商学部・経営学研究科の近年の取り組みとして、

アジア・日本研究フェローシップ事業、招聘研究者による招待講演・講義、外国人非常勤講師（国連職員・経営学研究科卒）による講義の取り組みを説明されました。

学生交流の取り組みの具体例としては、2004年のオックスフォード・プログラムでは、Audi 本社・研究開発センター訪問、ハートフォードカレッジでの英語研修、サイド・ビジネス・スクールでの講義の受講などがあることを説明されました。特に、単に英語を使うだけでなく、英語を使って、学習するということが盛り込まれていることを示されました。

学生交流の成果として、1) 国際感覚の向上、2) 将来の目標設定の促進、3) 多様な就職先、4) 海外大学院への進学、5) 共同研究の活発化などを、具体例を交えて説明して頂きました。

最後に、課題として、学生の経済負担、ケアの必要性、一貫した教育の必要性（フォローアップ）、参加人数の問題が挙げられました。

『現在の派遣プログラム（オックスフォード大学およびル・アーブル大学）について』

藤原亜里沙（商学部 四回生）

藤原さんは、オックスフォード大学・語学研修プログラムと、ル・アーブル大学・国際交流プログラムへの参加を通じて感じたことを、写真を交えてお話をくださいました。

オックスフォード大学での語学研修は、2004年3月11日～29日までの、ミュンヘンでの訪問を含む19日間をかけて、ハートフォードカレッジで行われました。

オックスフォード大学での語学研修を受ける前には、ドイツを訪れミュンヘン大学の学生との討論会に出席したそうです。それぞれの大学の学生が、「ドイツ式経営と日本式経営の違い」についてプレゼンテーションを行い、グループ・ディスカッションを行いました。

オックスフォードでの授業は、イギリスの社会や文化についての授業や、C.V.（履歴書）の書き方、グラフや映像を使ったプレゼンテーションの

仕方など、実用的なビジネス英語を中心に行われました。研修の最後には、自分たちで設立したヴァーチャル企業についての英語でのプレゼンテーションの課題に取り組みました。



授業後には、レジデンシャル・アドバイザー（カレッジの学生）の案内で、オックスフォードの町を散策し、アイススケートや、カレッジ対抗のボートレースを観戦したそうです。

また、BMW ミニの工場見学やサイド・ビジネス・スクールの訪問を通して、イギリスでのビジネスを学ぶというフィールドトリップを行ったそうです。

研修の成果は、1) リスニングや会話力の向上、2) 研修を通じてのイギリスの社会・文化について理解の深まり、3) 海外の学生との交流を通じての、自分自身の学生生活を見直す機会になったこと、4) アウディとBMWの訪問による、興味や関心の幅の広がりを受けておられました。

帰国後、3回生のゼミで、BMWとの共同研究に参加し、日本でのCM戦略について提案を行ったそうです。のちの就職活動でも、自分が語学研修中に会った学生に刺激を受け、帰国後に、残りの学生生活を密度の高いものにしたいと思い、英語だけでなく、商学部で学ぶ専門分野などいろいろなことに力を注いできたことをアピールし、複数の会社から内定を頂くことができたそうです。

ル・アーブル大学との国際交流プログラムは、まず7月にル・アーブルの学生が、1ヶ月間、日本で日本語の研修を受けます。日本からの派遣学生は、彼らの授業後や休日のプランを企画し、彼

らの日本での生活をサポートします。そして、11月20日～12月15日までの予定で、ル・アーブル大学でのフランス語研修、ホームステイを行う予定になっています。

現在の派遣プログラムへの要望として、オックスフォード大学での派遣プログラムでは、レジデンシャル・アドバイザーの他にも、もっと多くのカレッジの学生と交流を測る機会があればよかった点、ル・アーブル国際交流プログラムについては、ル・アーブルの学生に対し、商学部の授業を見学する機会を設けたり、また、商学部の学生が彼らと交流を深めることが出来るような、学生同士の交流がもっと深まるような企画が必要だという点をあげられました。

『海外インターンシップを実務界に生かして』 秋山和寛(2003年卒業、トヨタ自動車株式会社)

秋山氏は、学生時代、AISEC（国際経済商学学生協会）を通じて、約半年間、インドのソフトウェア・アプリケーションの企業で、インターンシップをされました。主たる業務は、日本企業からシステムを受注することだったそうです。

秋山氏は、インターンシップの経験を「会社に対して、実績は残せなかったんですけども、私自身は、半年間海外で生活するという経験も出来ましたし、実際に仕事をするという経験も出来たので、自分の思い描いていた姿と、自分の実力を見極めることが出来たんじゃないかな」と語られていました。

また、海外インターンシップの受け入れ先企業を探す過程で、自分に必要なスキル（英語力だけでなく、会計・ITの専門知識など）を客観的に把握することができたとおっしゃっておられました。

実際に企業に入ってみて、派遣先企業は、日本市場に初めて参入するので、日本企業のことが分からず、例えば、どの部署にコンタクトを取ればいいのか、プロジェクト・マネージャーとチーフと主任は誰が一番偉いのか、というような質問を受けたそうです。こういうことは、やはり働いて

みて日本企業を理解しないと分からないと感じたそうです。



インターンシップを含めた国際交流で得られた能力として、英語力、行動力、感謝する気持ちを挙げられました。英語力は、実際の職場でも海外企業からの問い合わせの対応に役立っているそうです。また、バックグラウンドが違う人ともコミュニケーションができ、日本人では想像できないような経験をコミュニケーションの中でリアルに経験できたそうです。また、海外で、一人でいると、待っていても誰も助けてくれず、自分から「助けて」と声を出さないと助けてもらえないという経験から、行動力とタフさが身についたと感じているそうです。3番目に、海外に行って、心細いお思いをしている時に、手を差し伸べてくれる人たちに出会い、本当に心から感謝する気持ちをもてるようになったそうです。

『実社会での学生時代での外国語学習、海外経験の必要性』有馬良雄(1979年卒業、日本化学機械製造株式会社)

有馬氏は、学生時代、AISECの活動に参加し、主に海外への送り出しや海外からの留学生の引き受けのための準備・企画や、香港・フィリピンへのセミナーツアーの企画・参加について、また、就職後の海外経験のお話を頂きました。

香港・フィリピンやでのセミナーでは、現地の大学のトップクラスの方々との経済学・商学に関するトップレベルの話で、分からない話であったけれども、カルチャー・ショックを受けたそうで

す。



その後、海外に行きたいという気持ちをもっていたので、海外に行く機会の多い商社に志望されたそうです。就職面接では、AISECでの活動を話されたそうです。有馬氏は、学生時代と社会に入ってからとの違いとして、自由な時間に、自由な立場で、見聞きできるのは学生時代しかないと感じているそうです。

有馬氏が、学生に対して一番言いたいこととして、「学生時代の自由な時間を使って、いろんなことを見聞きしてほしい。いろんなことを見聞きすることで、いろんな判断の仕方、自分の判断の仕方が、非常に狭いことが分かってくる。また、そのことによって、日本の良さっていうものも分かってくる」とおっしゃられました。というのも、戒厳令下のフィリピンでの経験や、就職後のスリランカでの物乞いのために手足をきっている子供たちの現状を見、啞然とした経験があったからだそうです。

また、語学留学プログラムについて、がっかりとした予定を組んでいる印象をもたれたそうで、学生への負担が重いのではないのかと指摘されました。その上で、それを解決する策として、AISEC とのコラボレーションを提案されました。

.....
セッション2 (パネルディスカッション)
『商学部生の国際交流を進めるために』
.....



「国際交流プログラムの進展に向けて、商学部に欠けているものは何か？」

司会一 現在、商学部学生の国際交流の機会は、着実に広がりを見せつつあるように思う。

プログラムに欠けているものや、物理的・精神的・金銭的・制度的な制約には、どんなものがあるのかをお話していただきたい。

岡野一 学生の経済的負担がある。大学全体としては、学友会が出来たけれども、入会して、申し込めば、補助が当たる可能性があるが、まだまだ少数であり、その辺りをどうするかという問題がある。

商学部の中では、オックスフォード・プログラムを拡大し、経営学会で補助や、生協の旅行代理店機能とのコラボレーションが出来ないかと考えている。

あるいは、学長が今進めている全学レベルでの英語研究センター、ネイティブスピーカーに英語の授業を担当してもらおうという全学的な仕組みとして、行っていく必要がある。関関同立などの他大学も、全学的な仕組みを持っている。

組織改革としては、コース制の再編によって、英語での一貫教育体制を構築することや、国際部のような部署を作ることや、外部資金の獲得の必要がある。

藤原一 国際交流プログラムの派遣学生の人数の面での制約がある。オックスフォード・

プログラムは、希望者全員が参加できるが、ル・アール・プログラムは、毎年4名に限られている。熱意がある学生には、できるだけ多くの学生に貴重な経験をしてもらいたいので、人数の枠を広げて欲しい。

また、派遣期間を、より長く勉強したい学生には、もう少し長い期間、留学できるような柔軟なプログラムがいいと思う。

太田一 学部の中で、勉強も含めた、より高度なプログラムを進めていきたい。そのためには、向こうの大学の学生が、日本に来た時に、うちの大学の中でいかに体制を作り上げるかが課題になる。それがないと、こちらから派遣できないということになってくるので、何とかしたい。

具体的には、来日した学生の国内の住居がまず大事である。それを確保することが一つの課題。それと、大学の中での教育プログラムが大事になる。これは、教員の責任かもしれない。また、来た学生に対しての、研修プログラム、例えば、企業での一週間から10日のインターンプログラムなどを向こうの学生のために作っていかないと、交換にならない。提携交渉は、いくらでもできるが、その後がうまく行かない。

事務組織は、大阪市からの派遣ということで、大学業務に疎いので、あまり協力してもらえないことを期待できない。事務組織を作ったとしても、市からの補助金は、なかなか獲得できない。この場をきっかけに、ぜひとも、安井会長を含め、商友会の方で協力していただきたい。

「国際交流を進めるために、何が重要か」

司会一 先ほどは、現場で国際交流に関わっている内側の視点から、制約と課題を挙げただいたが、外側、卒業生の視点から、どのような方法、あるいは方向性がありうるのかについて、ご意見ご提言を頂きたい。



秋山一 ルールだけ作って、学生に自主性を与えてあげれば、いい方向に進んでいくと思う。

ル・アール大学の国際交流プログラムにしても、学生に義務感を持たせて、彼らに報告会を開かせたり、次年度の参加者を勧誘させたりするといい。枠を増やすという話もあるが、応募者自体が少ない。どうやってもっと活発にさせていくかを、行った学生に考えさせるというのも、一つの手かなと思う。

有馬一 今は、大学側がプログラムを与えて、学生に行きなさいよと薦めるという感じで、学生が受身的になっているように思う。現在大学にある、交流できる団体を利用して、レセプションのような形にするのが無理がないように思う。その辺をもっと活用されたらいいと思う。

安井一 事務組織について、学友会・商友会・校友会の三重構造になっている。学部単位でなしに、学校全体でどうするかというのが、学友会なので、学友会主体で、協力していくという方法しかないと思う。

フロア一 オリビエ・ペステル氏：2001年度ル・アール大学プログラムでル・アール大学から市大に留学。フランスの場合、自分が努力しないと競争が激しいので、負ける。負けないためには、海外のインターンシップを利用するのが、一番よい方法だと思う。

岡野一 現在、進めているものとして、ミシガン大学のサマーインターンシップ（ビジネススクールと工学部の共同運営）のプロジェクト

クトに参加させてもらおうと考えている。

また、それだけでなく、現地の日系企業に働きかけ、学生のインターンシップだけではなく、研究と教育の両方で進展させる仕組みができないかと考えている。また、ソウル大学との話し合いでは、一ヶ月程度で、ソウル学生は、日系企業でインターンシップをし、こちらの学生は韓国企業でインターンシップをするという相互協定を結びたいと話合っている。

それから、合同報告会、自分がどういう経験をつんで、どういう能力を身につけたのかを前面に出しながら、就職に役立つように、これに精華大学・上海財形大学などを含め、日・中・韓で教育上の交流というものを引き受けてくれる会社を探している。そこに、ノウハウをもっておられるアイセックやOB・OG等の団体などに、特に留学生の精神的なものについての協力をしていただければと考えている。それと国連との共同研究について、世界的に必要であるので、学生も巻き込んで進めて生きたいと考えている。

フロア 商学部として、どの程度の優先度をもっているテーマなのか。他の大学では、現地に事務所をもっているところがある。個々のプログラムは、どのように選ばれたのか。

太田 個人的には、一番重要だと考えているので、学部の総意が取れる形で、行っていきたくて考えた。ル・アーブル、サンクト・ペテルスブルグは、大阪市との姉妹都市であることから、プログラムが作られた。オックスフォード・プログラムは商学部独自で行っている。

フロア 商友会は、どう機能しているのか。

提案として、海外留学プログラム自体期間が短いように思う。国際交流コースみたいなものを作って、1年くらい留学するなどのコースを作ってほしい。

安井 学友会・商友会・校友会などの組織ができ、現在、それぞれが何をするかについての整合性が取れていない状況です。そのため、なかなか会議を開くことができていない。



「学生にとって、国際交流は、どのような意味があるのか。」

司会 ご自身のご経験を踏まえ、一言ずつコメントを頂きたい。

岡野 私たちの学生の頃は、自分たちで何かしなければならぬ。大学には、頼らないというムードがあった。パネラーからのコメントもあったように、確かに学生が自分からやらないといけない。しかし、一方で、学部として、サポートやチャンスを与えるためのガイダンス、チョイスできるメニューを作るのは、教員としての責務と思っている。ですので、OB・OGの方々にもぜひ賛同いただいた上で、推進していきたい。また、いろんな方向性を考えているので、ご支援いただければと思っています。

秋山 先ほどのコメントに付け加えると、国際交流をすることで、よい刺激を持ち続けることができると思う。

藤原 学生自身が目的を持って、意欲的に学ぼうという気持ちをもって、プログラムに参加することが重要だと思う。また、多くの学生に興味を持ってもらうには、研究内容の報告で、何を得てきたか、どういう点がよ

かったのかということを知ることが重要だと思ふ。

有馬一 海外に出て、国際交流をしてどうするかという点まで考えると、相手の立場を考えて自分を主張するという事、その結果、自己を確立することにつながると思ふ。

太田一 今は、国際交流することが普通になった時代の中で、その普通なものをご提供できるのかということがわれわれの責任だと思っている。そういう中で、モチベーションを高めるといふ意味で、こういうプログラムを少しでも今後進展していきたく思っている。非常に貴重な意見を頂いたので、それをまとめ、私たちとしても、市大の学生のモチベーションを高め、レベルを上げていくよう、教育プログラムを作つて生きたいと思ふ。

.....

閉会の挨拶 西倉 高明

(本学部教授、商友会幹事)

最後に、西倉先生より、「商友会を活発にさせていくために、卒業生の方々にも、協力していただきたい。お金があるんなら、出してください。お金がないなら知恵をかしてください。知恵がないなら、労力を貸してください。どうぞ、商学部を見放さないで、協力して下さいますようよろしくお願い致します。」と、まとめられました。

(以上。)



(受付をして下さった西倉ゼミのみなさん。)

<編集後記>

このニューズレター特集号は、先生方、学部学生の方々、そしてご多忙な時間を割いて参加していただいた卒業生の方々の意欲的な共同作業によって実現した「商学部生の国際交流を進めるシンポジウム」に参加した一人の学生の視点から作成しました。文面、構成等でご多忙な点が多かったのではと思ふますが、いかがでしたでしょうか？

大学院学生 (平成18年度RA) 井上 祐輔

<発行>

大阪市立大学大学院経営学研究科・商学部

〒560-0002

大阪市住吉区杉本3-3-138

電話：06-6605-2200

ホームページ：<http://www.bus.osaka-cu.ac.jp>

下図は平成18年度より導入された新しい市大のロゴマークです。

